東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム多摩

No.20

発行
1999年3月31日

「奥多摩 水と緑のふれあい館」オープン

当館は奥多摩郷土資料館（昭和53年開館）を取壊した跡地に、平成10年11月27日にオープンしました。設置者は東京都水道局並びに奥多摩町。施設の概要は、敷地面積5,325.26㎡、鉄筋コンクリート２階建、建築面積976.50㎡、延床面積1,830.88㎡、水源ＰＲ施設として、また、水源地と都市の人々との交流を深めることを主たる目的に、東京近代水道100周年、小河内ダム竣工40周年の記念事業の一環として建設されました。

○水源ＰＲ施設として

水の大切さを認識するために水源林の発生と機能、貯水池の役割・技術、そして家庭の蛇口に至る過程を理解していただくこと、また、周辺の自然の姿を様々な手法で紹介し、人と自然との調和の大切さを理解していただくものです。

○文化財資料展示施設として

見ること、聞くことの体感により郷土芸能の文化的意義を理解していただくこと、また、歴史的な生活用具に接することにより、昔日の生活における労働と知恵、苦渋と喜びを理解し、それらの保存伝承の大切さを知っていただくことが展示の基本的な考え方です。

○奥多摩交流センターとして

恵まれた自然、忘れかけた生活の知恵、息づく文化など、都市では次第に失われてゆく貴重な財産が奥多摩には沢山残っています。その素晴らしさを体験することと、山村と都市の人々がふれあうことのできる交流の場を提供します。

4館合同企画「トラム(路面電車)とメトロ(地下鉄)」を開催して
—地域博物館における展示会共催のこころみ—

新宿歴史博物館　奥　原　哲　志

昨年7月18日より11月1日までの期間、新宿歴史博物館・板橋区立郷土資料館・豊島区立郷土資料館・北区飛鳥山博物館の4館による合同企画の展示会「トラム(路面電車)とメトロ（地下鉄)」が開催され、多くの方の好評を得て終了することができた。区立の博物館・資料館による共催展としては、平成6年度に開催された板橋区立郷土資料館・足立区立郷土博物館・品川歴史館・新宿歴史博物館による「江戸四宿」、同8年度板橋区立郷土資料館・豊島区立郷土資料館・練馬区教育委員会による「千川上水」に次ぐものである。

共催展といっても、美術館の全国巡回展のような大規模な展示会とは異なり、範となる前例も少なく、確たる方法論もないなかで、試行錯誤を繰り返しながら開催にこぎ着けた、というのが本当のところである。私たちのこうした経験が他館の展示担当者の方の参考になればと考え、共催を思いたった発端から、開催へいたる経過、来館者の反応、展示会を終えての問題点等について、ここに記したい。

1．発　端

それは7年ほど前に遡る。当館では平成4年の冬に新宿駅の歴史とそれにともなう町の変遷の姿を紹介する展示会「ステイション新宿」を開催し、翌5年にこの展示内容を中心にまとめた刊行物『ステイション新宿』を出版した。

近現代における新宿の歴史を考えるにあたり、交通機関の発達は大きな位置を占めている。特に日本一の規模を誇る新宿駅周辺の繁華街の発達過程は、新宿駅の変遷と不可分の関係にある。こうした視点を切り口にしたこの展示会には大きな反響があり、多数の来館者の方にご覧いただくことができた。また展示会の好評を受けて刊行した前記の図書も、すぐに売り切れるという人気ぶりであった。

一方、板橋区立郷土資料館では平成7年の夏に「板橋の鉄道—東武東上線—」と銘打って板橋区内を通る東武鉄道東上線を取り上げた展示会を開催した。数ある関東の大手私鉄のなかでもマイナー度では一、二を争う路線をテーマとした展示会のため、どの程度の来館者が見込めるものかと懸念されたのだが、実際には郷土資料館の展示会来館者の新記録を樹立するほどの人気ぶりであった。こうした経緯から、鉄道ものの展示会は数多くの入館者が見込めるテーマであることが明らかになってきた。

また、鉄道史の分野は交通博物館が大正10年に開館（当初は鉄道博物館）していることからも分かるとおり、研究史の蓄積が多く、さらに趣味としても早くから多くの方が取り組んできたため、趣味者の研究や記録が膨大にストックされている。これまで、博物館・資料館がこれらの成果を活用する機会は少なかったが、新宿・板橋の展示会では、こうした蓄積のうえに立った展示内容であったため、内容的にも一般の方はもちろん、いわゆるマニア層にも十分アピールし、その結果が動員に結びついたといえる。

こうした経緯をへて、私と板橋の担当者との間で、機会があれば改めて「鉄道の発達と地域の変容」といったテーマで展示会を企画してみたいと、折にふれて話し合っていた。そして、新宿では先の展示会で都電（路面電車）についてほとんど触れていなかったこと、板橋では東上線のほかに主要な鉄道路線として都営地下鉄三田線（地下鉄）があり、やはり展示では取り上げていなかった。一方、鉄道は一自治体の範囲を超えて、より広範な地域に路線を広げていることから、沿線の複数の館が展示テーマとして取り上げることが可能である。そこで、周年などなんらかのタイミングに合わせて東京における交通機関の変遷（路面電車から地下鉄）をテーマとして展示を企画し、共催することができたら、と考えるようになった。

2．呼びかけ

その後、平成10年が新宿区内を走っていた主要な都電路線・11系統（新宿駅前—月島通八丁目間）の廃止から30年にあたり、また板橋区内を走る都営三田線（三田—西高島平間）の部分開業からも30年にあたることから、平成10年度の夏の展示会として共催したいと考え、それぞれの館内で話し合い、開催の了解を得た。

そしてテーマ的に共通性を持つことから、2館だけで開催するのではなく、現存唯一の都電路線である荒川線沿線に当たる豊島区・北区・荒川区はテーマ的に連携が可能なのではと考え、平成9年春に各区の資料館・博物館準備室の学芸担当の方に打診をした。その結果、荒川区は10年度に資料館のオープンを予定しているが、この時点では開館日が確定しておらず、参加は不可能との回答であった。そこで9年6月に新宿・板橋・豊島区立郷土資料館・北区郷土博物

館建設準備室（平成10年３月に北区飛鳥山博物館として開館）の担当者が集まり、私の方から都電・地下鉄を中心とした展示会を10年度夏の展示会として共催することを提案した。

この会合では、展示会を共催することの利点として、①鉄道は各区内で完結するものではなくその路線は広範にわたり、都電・地下鉄路線のある区ならテーマ的に取り上げることが可能なこと、②テーマの共通性と同時に、各区域の状況を提示することで各区ごとの独自性が発揮できること、③単独開催するよりもより広範囲にアピールできること、④いわゆる鉄道マニアだけでなく日常的に鉄道を利用している人々にいたるまで、鉄道に関心を持つ層は幅広く、多くの動員が見込めることを挙げた。そして、まだこの段階では共催内容の詳細は具体化しておらず、手本として「江戸四宿」の例をあげ、展示会タイトルの統一・会期の統一・展示内容の分担・印刷物の共同作成等を可能な範囲で行いたい、との提案をした。

これに対して、豊島区は開催に関して前向きに考えたいが、予算的・会期の問題があり、北区は開館後の企画展の位置づけがまだ確定していないことから、各館に持ちかえり再度話し合うことになった。また、10年度の予算要求では、各館の展示会の予算規模が異なっているため、通常の展示会規模で印刷物は図録を制作する、イベントのための賃借料を確保する、という形で予算要求をした。

一方、この時期より新宿・板橋の担当者は対外的な交渉・調査を開始し、東京都交通局・荒川電車営業所・交通博物館・地下鉄博物館・東京都公文書館・個人の資料所蔵者を訪ね、企画への協力を依頼し、資料の所在等の調査を開始した。また年明けからは豊島の担当者も調査に参加し、共同で調査を行った。これにより調査の効率化・情報の共有化が進み、その後の展示内容を詰めていく段階での話し合いを、きわめてスムーズに進めることができた。

その後、年明け後の平成10年２月に４区の担当者が再度集まり、共催に関する話し合いを持った。その結果豊島・北区ともこの展示会に参加することとなったが、豊島は夏休みに毎年恒例の平和展が予定されているので、他館とは会期をずらさざるをえないこと、予算的には十分な対応がとれないが、事前の調査も含めて積極的に参加したい、との意向が示された。また北区は、館の方針として、春・秋の企画展が年間を通じての中心となる展示会で、夏休みについては小中学生向けのパネル展程度のものを考えており、予算についてもその範囲で考えたいとのことであった。各自治体のなかでの博物館・資料館の位置づけ、館内での展示に対する考え方の相違はいかんともしがたい問題である。経験の少ない我々にとっては、これ以上の調整は難しく、以後各区の置かれた状況のなかで、足並みを揃えられる部分は協力しあい、それが無理な部分は各区の判断に任せて準備を進めることとなった。

３．準　備

平成10年度に入り、本格的な展示に向けての準備が開始された。まず交通局お客様サービス課へ４区の担当者全員が出向き、今回の展示会が４館の合同企画になったことを報告し、交通局による後援を依頼した。この交通局の後援を受けたことで、交通局各部署のご協力がいただけることとなった。

この頃から、４区の担当者間では頻繁に会合を持ち、共催の内容を固めていった。まず展示内容については、新宿が都電のあゆみ・新宿と都電・荒川線の変遷・再び脚光を浴びつつある路面電車の現況について取り上げることにし、板橋は地下鉄のあゆみ・都電から三田線への変遷・新しい地下鉄とした。また北区は区内を走った都電路線のかつての写真を中心としたパネル展示を行い、豊島は都電の歴史・荒川線・都電と豊島区・トロリーバス・地下鉄について取り上げることとし、資料・内容的に各館の展示内容が重複しないように調整した。

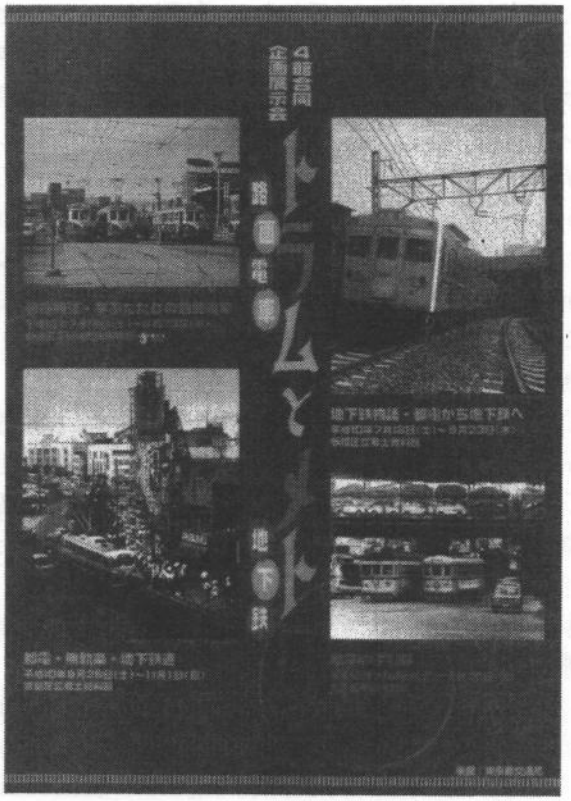
そして展示会名については、各館個々にサブタイトルを設けたうえで、統一タイトルを設定することとし、各担当から出された案を検討した結果、４館合同企画「トラム（路面電車）とメトロ（地下鉄）」と名乗ることにした。さらにサブタイトルについては、新宿が「都電物語―今ふたたびの路面電車」、板橋が「地下鉄物語―都電から地下鉄へ」、北区が「都電の住む町」、豊島が「軌道・無軌条・地下鉄道」とした。

一方会期については、新宿・板橋・北区の開催初日を揃えて７月18日(土)からとし、北区は夏休み中の８月30日(日)に終了、新宿・板橋は９月23日(水)まで、その後をうけて９月26日(土)から11月１日(日)まで豊島が開催することとした。

印刷物については、ポスター（Ｂ２判・Ｂ３判）、チラシ（Ｂ４判二ツ折）、そして図録（Ａ４判112頁）を作成した。予算の関係から、ポスター・チラシは新宿・板橋・北区の予算を出し合い、図録については新宿・板橋の予算で同一業者に発注した。ポスター・チラシは同一デザインとし、４館の展示・イベントの情報をすべて盛り

込み、ポスターは3,600部、チラシは2,000部印刷した。同一業者・同一デザインのため単価が下がり、通常よりかなり多めに印刷することができた。

図録については、新宿・板橋の展示内容を一本化し、さらに豊島の展示内容の一部を盛り込んだ共通図録とした。A4判カラー16ページ・モノクロ96ページの計112ページで、写真を中心にグラフィカルな構成とし、鉄道趣味界のベテラン3名の方に原稿を寄せていただいた。約500点という膨大な点数の写真を掲載して、東京におけるトラム（路面電車）からメトロ（地下鉄）への交通機関の変遷の状況を、各区の事例をもとにトータルに捉える内容を目指した。また、北区は単独でB5判32ページの図録を作成した。

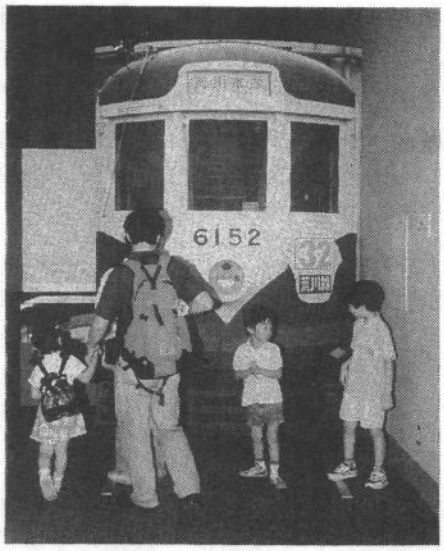


4館の情報を盛り込んだ「トラムとメトロ」チラシ

こうして、資料の所在調査・借用交渉、展示資料の確定・展示構成の検討・造作物の確定、図録編集・原稿執筆、イベント準備、広報活動、個別の問題が発生するごとに各館で調整等々、展示とそれにともなう諸々の準備に追われるうちにまたたく間に月日は流れ、展示造作工事・資料借用・列品作業を直前まで行い、オープンへとなだれこんでいった。

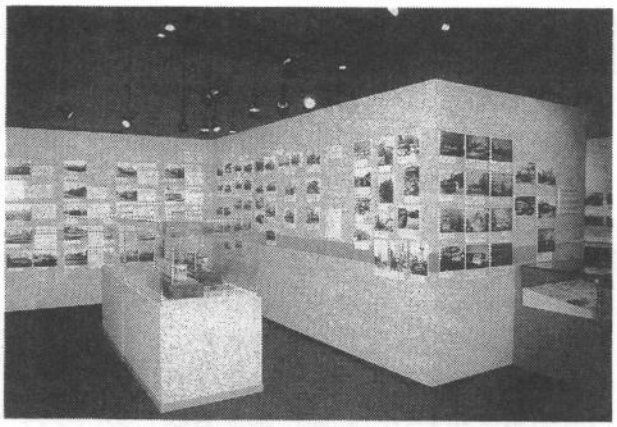
4．開　催

こうして7月18日、新宿・板橋・北区はヘロヘロになりながらも開催にこぎ着けた。事前の広報活動として、ポスター・チラシは各館が配布先を分担し、都内博物館・資料館、図書館、各自治体社会教育課、各区内施設・掲示板に掲出した。また一部の都電停留場・都営地下鉄の駅にも交通局のご好意で掲出していただいた。通常の単独展示ではカバーできない広範囲にポスターを掲出できたことで、たとえば板橋区内の掲示板を見て新宿の展示を見にくるというパターンも生まれ、共催のメリットが十分に発揮された。



子供たちも大喜び、新宿歴史博物館の展示会場入口の都電原寸大ディスプレイ

また開催後も、各館独自のルートに情報を流し、新聞・テレビ・雑誌などに働きかけた。その結果、新聞は朝日新聞マリオン（7月23日付）、東京新聞東京版（7月29日付）、読売新聞東京版（8月6日付）、朝日新聞東京版（9月10日付）など、テレビはNHK首都圏ネットワーク（8月7日放映）、雑誌は「東京人」98年9月号（インフォメーション）、「サライ」98年8月20日号（サライ・インフォメーション）、鉄道趣味誌各誌に取り上げられた。また、先の自前のポスターのほかに交通局の「ぴっくあっぷ」をはじめとする各種広報媒体、営団地下鉄の催し物案内にも情報が掲載された。やはり通常の展示よりも規模的に大きかったことが、各媒体の関心を呼んだのか、内容が時宜にかなったものであったのか、通常よりも広汎な方面から取り上げられることとなった。


新宿歴史博物館の展示会場

こうした広報活動の結果、各館ともオープン当初から多くの来館者があり、好調な出足であった。また、1館見て終わりではなく、各館を巡回する観覧者も多く、この面でも共催の効果が十二分に発揮された。チラシにスタンプコーナーを設け、各館で作成した記念スタンプを会場に用意したことも、観覧者に巡回意欲を誘発したようだった。各館を巡る観覧者が多かった

都電を貸し切ったレトロ電車乗車会

ことは開催側の狙いが見事に当たったものといえる。

一方、会期中のイベントについては、各館単独開催としては、講演会は新宿が4回・板橋が1回、映画会は板橋が2回、北区が1回、フィールド・ワークを豊島で2回実施し、それぞれ多くの参加者があった。また荒川線に現存する都電全盛期に活躍したレトロ電車（6000形）を貸切りで走らせた乗車会を、新宿・板橋2回、北区1回開催し、往年の都電の走りを堪能した。さらに4館合同で、都営地下鉄12号線の光が丘検修場・三田線の志村車両基地・荒川線の荒川車両基地の見学会を開催した。1ヶ所につき各館1回の計4回開催し、募集も各館ごとに行った。館によって応募状況が異なり、定員オーバーの館、定員割れの館があったが、定員オーバーの館の落選者を定員割れの館の実施回に割り振るなどの調整を行い、応募者の多くがイベントに参加することができた。こうして、通常展示よりもはるかに多くのイベントを開催し、会期中一部資料の展示替えを実施するうちに、8月30日に北区の展示が終了、9月23日には新宿・板橋の展示も終了した。

志村車両基地見学会、30トンクレーンによる車体吊上げ作業

そして、イベントの合間を縫いながら準備を進めていた豊島が9月26日にオープンとなった。1館のみ完全に会期がずれていたため、果して動員の面でどうなるか懸念されたのだが、3館の展示を見た方の多くが足を運んで下さり大盛況となった。他館の展示が豊島にとっては事前の宣伝となったのである。これは予想外のうれしい誤算だった。また資料面でも、3館の展示を見たことで、資料提供を申し出る方が多くあり、展示スペースが不足する状況となった。これも予想外の事態だったが、共催の副次作用と言えるだろう。それまでに3館でスタンプを集めた方々も、最後の1個を押すために多く来館し、全部集めた方には交通局提供の記念品を差し上げた。スタンプの効果も馬鹿にならないものがあった。

こうして、予想外の展開のなか、11月1日に豊島の展示が終了し、4館の会期がすべて終了となった。会期中の入館者数は新宿が5,299名（会期58日間）、板橋が9,365名（会期58日間）、北区が5,331名（会期38日間）、豊島が3,011名（会期30日間）であった。

5．総　括

こうした経過をへて、「トラムとメトロ」はなんとか終了することができた。担当者としては、共催に関する様々な処理案件が発生するたびに、その場その場で対応するうちに開催にいたった、というのが正直な感想である。最後に展示に関連する個々の事項について、担当者として現段階で思う所をまとめてみたい。

まず、今回の展示会は4館での共催のうえに、東京都交通局の後援という冠をいただけたことが、外部との交渉やイベント開催のうえで非常に有効であったことがあげられる。実質的には名義貸しといった形態だったが、広報活動や資料所蔵者との交渉といった面で、相手に信用をえることが容易となった。また交通局内部においても、会期中のイベントの実施について、本局から直接声をかけていただき、通常は見ることのできない車両検修の現場を見学させていただくことができた。これだけ大規

模なイベントを開催できたのも、交通局の後援があればこそであった。

会期については、開催側の都合でどうしても1館だけ会期がずれてしまい、それがどのような結果になるか来館者の反応が心配されたのだが、最後の豊島に予想以上の来館者が訪れる結果となった。他館の展示が豊島の展示への事前宣伝の役割を果していた。開催前は共催の場合会期は揃えるべき、と漠然と考えていたのだが、来館者にとっては必ずしも会期を完全に揃える必然性はない、というのが現在の結論である。むしろ、少しずつ会期をずらしたほうが、アナウンス効果が生じ、後へいくほど来館者が増えるようである。展示資料館の充実という点からも有効であった。

新宿・板橋の展示図録については、図録用の写真撮影が5月末まで伸びてしまったため、編集・原稿執筆作業は実質4週間というハードなスケジュールになってしまった。しかし、多くの方々から提供していただいた資料・写真を可能な限り取り入れて、何とか1冊の図録に仕上げることができた。当初は、新宿で都電、板橋で地下鉄と展示内容に合わせて個々に図録を作成する案もあったのだが、1冊にまとめることで、東京における交通機関の変遷について、その流れがより理解しやすくなった。そしてなにより単独で編集していては、これだけ盛り沢山の内容の図録は作成できなかっただろう。頒布価格も通常の二倍の3,000部印刷したので800円という廉価に設定することができた。お手頃価格ということもあり、この図録は大変よく売れた。会期中に新宿で807部、板橋で541部とこれまでにない売れ行きで、内容的にも大方の好評をえることができた。これは今回の共催の非常に大きな成果だったといえる。また北区の図録は300円で頒布した。

展示内容については、新宿・板橋間ではグラフィックパネル・サイン類のデザインを統一した。展示構成は全体の流れを概観するコーナー・各地域の状況を詳細に見るコーナー・過去だけでなく現在を見据えこれからを展望するコーナーを設定するようにした。しかしながら、各館の調整不足から、結果的には4館を通じて整合性がとれていたとは言えない部分もあった。展示内容については、大枠の設定にとどめ細部は各館の独自性に任せる、という方針だったため止むをえない面もあったのだが、来館者のアンケートには内容の重複・不整合・レベルのバラつきを指摘する声も見受けられた。各館の展示への取り組みのスタンス・予算規模にも関わってくる問題であり、簡単に結論はでないが、この点は共催をするにあたっての一番の問題点と言えるかもしれない。

入館者数については、先にあげたとおり各館の通常の展示会を上回る数字を記録した。共催による巡回効果が存分に発揮されたと言える。また数多くのイベントを開催したことで、何度も各館を訪れるリピーターも多く見受けられた。またアンケートを見ると初めての来館者も多く、各館の存在をより広い層にアピールするという点でも有効であったように思う。さらに来館者の内訳は、いわゆる鉄道マニア・親子連れ・一般客の割合がそれぞれ3割ずつ、といったところであった。通常であれば展示テーマに関心のある層が中心になるところだが、今回はかつて都電を日常的に利用していた方々が、懐かしさもあって訪れたり、電車好きのお父さんが夏休みに子供と一緒にやって来たりと、様々な層の方に展示を見てもらえた。区民だけでなく、都内や近県から来館する方も多かった。鉄道というテーマが、より広い層にアピールした結果といえる。展示を見た感想もアンケートを見るとおおむね好評で、図録・イベントを含め満足度は高かったようである。

以上、細かいことを書き連ねてきたが、今回こういった形で共催展を開催してみて、大変であったが、やってよかったというのが担当者個人の感想である。共催のための様々な調整・各館の足並みの不統一・まとめ役への過重な負担といった問題はあるが、各自治体の財政難が叫ばれるこの時期、各館の予算規模の減少傾向は今後も続くものと思われる。そういった状況のなかでは、各館単独の展示会が予算的にも内容的にも否応なく規模を縮小せざるをえない方向へ向かうことは確実であろう。こうした周辺環境の悪化へのひとつの対応策として、共催という方法論を模索し実行したわけである。展示内容・広報活動・予算面でのスケールメリット、さらに各館の担当者が集まり知恵を出し合うことによるマンパワーの結集、調査や展示準備を通じての学芸員間の切磋琢磨等々、多くの利点を指摘することができる。また私自身も、共催展を企画・実施することで、これまでにない貴重な経験を重ねることができた。他館の担当の方と一緒に仕事をすることで、これまで以上に相互に理解を深めることができた。これらの体験は、今後仕事を進めるうえで貴重な財産になると思う。

拙い経験談ではありますが、今回の私たちの試みが他館の皆様の参考になれば幸いです。

博物館の連携について

八王子市郷土資料館

近隣博物館の連携といえば、1994年の秋、足立・板橋・品川・新宿の区部4館が共同して企画・開催した特別展『江戸四宿』を思い出す。4館が実行委員会を組織し、共同の展示図録を作成したが、各館の展示内容はそれぞれに、千住宿・板橋宿・品川宿・内藤新宿を取りあげて、独自に展示を企画するという手法をとっていた。

その後、区部ではこのような試みが続けられていて、1996年には豊島・板橋・練馬の3区が千川上水通水300年記念事業として、それぞれ千川上水をテーマに特別展を開催したほか、今年度には、新宿・豊島・板橋・北の4館合同企画展示『トラムとメトロ』を開催したことは記憶に新しい。

これらの諸区は、江戸近郊として、また東京市街の外縁部として発展した地区で、同一テーマを設定した上で、なお地域の特性を考えるという企画を中心に据えた連携事業が積み上げられており、その成果には学ぶべきものが多い。

一方、多摩地区でも同じころ、本誌No.16(1995年3月刊)で『博物館の連携の必要性』について加盟各館の意見を小特集とした。多くの館から賛同の声が寄せられ、特別展の共同企画、巡回展、共同調査・研究の必要性が提案されるなど、その機運は確かにあった。

しかし、多摩地区では、近隣博物館による共同企画というレベルでの連携は、今まで実現していない。誰もが考えるように、多摩もしくは南・北・西多摩という地域の中で、あるいは、こうした地域を越えた川筋・街道筋・鉄道網での繋がりの中で、共通のテーマを設定し、共同調査や共同企画を実践することは、充分に可能なはずなのに。

区部型の共同事業によっても、各館独自の研究課題の深まりとさまざまな情報の共有化ができるなど多くのメリットが認められている。いま、行財政改革の進む中、巡回展など経費節減につながる企画など、さらに一歩踏み込んだ共同事業の実現にむけて、三博協としても本格的に議論すべき時期を迎えている。

生涯学習と「自然を調べてみよう」の講座

高尾自然科学博物館

生涯学習への取り組みが盛んである。

先日発表された生涯学習審議会答申では「生涯学習社会の構築に向けた社会教育行政」の項で「住民の自主的な学習活動を支援・促進する役割を果たしていく必要がある」としている。

当館の「自然を調べてみよう」の講座は、まさに"自主学習のお手伝い"であり、近年、内容を充実させつつあるので紹介したい。

この講座は5月から11月の間に5回開催し、1回目に参加者と担当職員とが個々に話し合い、2回目までに参加者が自分のテーマを決め、2回目から4回目は観察の進捗状況に応じて相談等を行い、5回目に成果を発表して終了する。

参加資格は18才以上で5回出席できる方とし、意欲さえあれば知識や能力などは問わない。

この講座のポイントは自分で観察テーマを決め、工夫しながら観察を進めるところにあり、初めは自分で進めていかなければならないことに戸惑った方でも、いつの間にか自然の中に浸り込んでいく自分を楽しむようになっている。

当然のことながら、そこに至るまでには学芸員を初めとする職員のきめ細かい対応を必要とする。すなわち、参加者の知識や能力に加え、自然観察可能な時間、場所や方法なども把握したうえで、それに相応しいテーマや観察方法をアドバイスしたり資料提供を行うなどである。

また、対象とする自然の分野ごとに班を分け、それぞれに担当職員を決めているが、各担当職員が参加者全員のテーマや方法、進捗状況などを把握し、担当職員が不在のときでも個別相談にも応じられるように努めている。

講座の最終回では、その時点での成果を発表していただいているが、その後も観察を継続される方が多い。今年の発表会でも継続観察の成果を発表してくださった方々がいた。

地味な講座ではあるが、ライフワークが見つかったと喜ぶ方を見ると、本当の意味で「生涯学習の支援」ができたのではないかと感じる。

今年度の活動から

あきる野市五日市郷土館

五日市郷土館では、市民から寄贈を受けた貴重な資料を広く公開することにより、市民に地域の歴史・民俗・自然などについての理解を深めてもらうことを目的に、今年度は企画展１回、企画写真展４回（テーマに関連した資料も併せて展示）、収蔵品展２回を開催しました。

今年度の企画展示の中で特に好評を得ました企画展「あかりとくらし」を開催して感じたことを紹介したいと思います。

企画展「あかりとくらし」では、照明具の移り変わりが分かるように館の収蔵品を中心に展示し、大正５年８月に設立された秋川水力電気株式会社に関連した写真や従業員用の半天などの資料も併せて展示しました。また、昔の生活の様子を体験してもらうために、展示室の一部に行灯のあかりがどの位の明るさなのかを体験できるコーナーも設けました。

企画展「あかりとくらし」を開催して印象に残ったことは、多くの来館者から聞いた「体験コーナーの設定がよく、昔の生活の様子を感じることができた。」「行灯のあかりの暗さに驚いた。」「いろいろな照明具の明るさが体験できると良かった。」という声でした。このことから展示品などをより充実させることも重要だと思いますが、来館者と展示の関係がより深められるような体験型の展示の必要性も改めて感じました。

当館の常設展示の一つの特徴として、民俗関係の資料は、触れる展示・動かして学べる展示としていることがあげられます。企画展の目的や内容にもよりますが、この特徴を生かした体験型の展示となるよう、今後も工夫していきたいと思います。

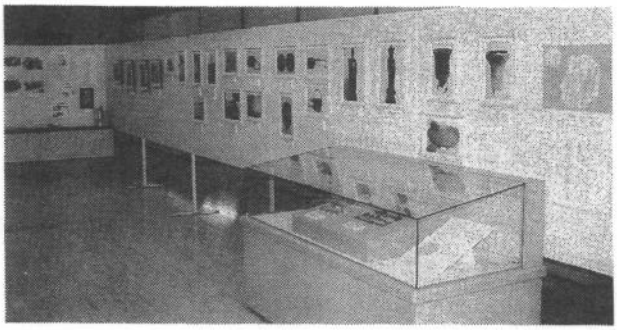
小金井・三宅島文化財展開催

小金井市文化財センター

小金井市と三宅村との友好盟約20周年を記念する企画展を10月17日～12月６日まで開催しました。友好のきっかけは、幕末～明治維新を生きた侠客、小金井（関）小次郎が三宅島に配流され、島民のために尽したことによります。小次郎は没後、芝居や浪花節によって大侠客のイメージが喧伝されていきますが、この展示では人別帳・三宅島からの手紙・借金証文・長脇差等関係資料によって小次郎の実像に触れることを主眼としました。また、三宅村の指定文化財や自然等を写真で紹介するとともに、縄文後・晩期の友地遺跡（三宅村伊豆）の出土品（江戸東京たてもの園所蔵）を展示しました。

また、６月20日～９月30日まで、「吉野ヶ里遺跡展」を開催しました。こちらは佐賀県千代田町出身の下村湖人が当「浴恩館」（青年団講習所）の所長を務めたことが遠因となっています。写真パネルを中心に実物の甕棺等を展示し、ビデオで遺跡発掘の様子を紹介しました。夏休み期間と重なり、例年より多くの小中学生の来館者がありました。

両展示とも友好関係から実現したもので、近隣市ではありませんが、これも一種の連携といえるのではないでしょうか。今後は、当市の歴史や文化財を紹介する展示を相手方で実現したいと考えています。



地域博物館と国際文化交流

くにたち郷土文化館

今回、ブルガリアとの縁があって、企画展「祝い装う―ブルガリア・日本の心」を10月24日から12月20日まで開催した（写真）。ここでは、日本の伝統的なお祝い着とブルガリアの民族衣装などを展示し、さらに民族楽器や装飾品、民族行事のビデオにより、両国の祝いの文化を比較した。

「なぜ、国立でブルガリアなのか」というと、そのきっかけとなったのが、昨年１月に開催した企画展「人生儀礼の諸相―誕生・結婚・葬送をめぐる人々」で、ここでは国立の旧村地域に残る講中という地域互助組織の膳椀や葬送用具、衣装などを展示した。これをブルガリア国立民族学博物館長で民族学研究の第一人者であるナデジダ・テネヴァ氏が見学に訪れ、「日本の旧村の人生儀礼がわかり大変興味深い。まさに私が見たかったものです。」と強い関心を示された。ブルガリアは伝統文化を重んじる国で、100年も前に民族学博物館ができている。その館長が日本の一地域の人生儀礼に関心を持ったというように、ローカルな伝統文化がインターナショナルになりうるということである。

これが縁でその後、学芸員がブルガリアで開かれたバルカン文化国際会議に招かれ、先の展示内容を発表する機会を得、現地の研究者と交流を持つことができた。そして今回テネヴァ氏とブルガリア大使館の協力で、貴重な民族衣装などが展示でき、さらにブルガリアの歌と踊りを開催したり、現地博物館からミュージアムグッズを取り寄せ、販売したところ大変好評であった。一つの展示が国際文化交流に発展したといえる。

今後も地域の資料を大切にして、人々の生き方、文化を広く世界に伝えていくよう努めたい。

『玉川上水通船史料集』の刊行

（財）たましん地域文化財団

当財団では、季刊の郷土研究誌『多摩のあゆみ』の他、多摩地域の調査・研究成果を紹介する図書の出版を行なっています。

平成10年11月に刊行した玉川上水通船研究会編著『玉川上水通船史料集』（Ａ５判・400頁・本体2,500円、発売：けやき出版）は、明治初期、玉川上水を走った船についての網羅的な史料集です。

明治３年の開業から５年の停止まで、わずか２年ほどしか営業されなかった玉川上水通船（以下「通船」とする）。甲武鉄道以前の大量かつ迅速な輸送手段として、多摩・東京の地域経済に大きな影響をあたえたと考えられます。

その通船についての一件文書「玉川上水通船一件」、明治初期の水道行政文書「上水諸窺簿」（通船関係部分のみ、両史料とも東京都立中央図書館特別文庫室蔵）を翻刻、また羽村から四谷大木戸までの玉川上水沿岸に残る地方文書から、通船に関するものを加え、336点を収録しました。資料は明治３年から５年までの営業期間だけにとどまらず、慶応期の玉川上水を利用した砂利輸送関係文書、明治16年の通船の再願をもくろんだ運送利益の見積書なども収録しました。

中央行政からのみでなく、多摩地域史の視点からも通船をとらえられる史料集です。

巻末には「どんな船だったか」「どこの誰が通船にかかわったか」「河岸・船溜りはどこにあったか」といった、通船の実態を考察した「解説」、年表をつけ、「通船」について時間的・空間的な通覧もできる内容になっています。

これまで余り研究がなされなかったこともあり、まだこの研究は端緒についたばかりです。これを機会に、さらに多くの通船に関する史料が発見されることを願ってやみません。

～当館の藁細工学習～

調布市郷土博物館

当館の催物のなかで昭和49年の開館以来文字通り細縄のごとく続いているものに稲藁細工があげられる。なかでも正月に向けたシメ飾り作りは参加者の好評を得ているので、今回は藁細工体験学習についてご紹介したい。

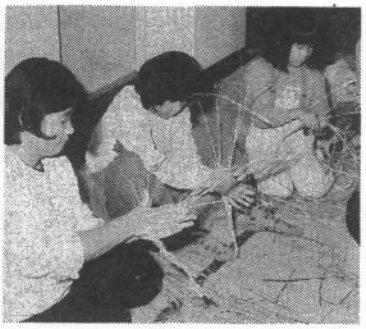
藁仕事といえば、自給自足時代の農村生活において冬の農閑期などを利用して家で使ったり売ったりする履物敷物などを家族や近隣、若者などの集団による共同作業で作るところも少なからずあった。

決して時間的に効率のよい作業とはいえないものであるが、その場は仲間同士の豊かなコミュニケーションや相互教育を通して連帯意識を育て伝承文化の継承にも大きな機能を果たしてきたといえる。

昭和57年の航空写真を見ても、市内の農耕地はほとんど住宅地などに囲まれて点在しているにすぎない。こうした環境の変化にともない学習材料である藁の入手もしだいに入手が難しくなりつつあるが、藁の持つ温もりと香りを感じつつ、自分の手で製品を作り出す経験の機会を継続して子どもに与えていきたいと思う。

当館ではシメ飾りのほか履物も作っている。その準備作業としての藁の袴とりには能率を上げるため、少し乱暴なようであるが足踏み脱穀機を用い、藁打ちは六年前にできた深大寺水車館の藁打ち杵でまとめて打つようになった。また子どもに草履を楽に作らせるために正座して編める台も手作りして利用してもらっている。

来年４月をめどに市内の一つの小学校のプレイルームを利用して郷土資料室を作ることになった。ここには農耕資料の延長に藁細工コーナーを設け、履物の製作工程も展示する予定である。そして必要に応じて藁を持込み、縄ない体験や履物作りなどを通して藁に親しんでもらえればと考えている。



ゾウリの鼻緒づくり▶

鄙なる館における所蔵品の存在価値

町田市立博物館

ここ数年、世間の不景気の風が文化行政に対して強く吹き付け、我々の博物館業務自体が円滑に進まなくなってきた。それに効くカンフル剤などはないと思うが、せめて、以前に予防接種を打って、免疫をつくっておけば良かったと悔やんではいないだろうか。

《大津絵・大黒　当館蔵》

当館は、開館以来、常設展示室を置かずに年間７～８本の企画展示を開催するという展示業務を行ってきた。その展示品は、かつて他館や個人のコレクションを借用することが主であったのだが、近年になってようやく館自身のコレクションが増加し、また多様化（陶磁器・ガラス器・錦絵・大津絵・考古民俗資料など）したため、館蔵品のみによる展示が可能になりつつある（これは、ここ数年の間に当館へ資料を御寄贈いただいた方々のお陰でもあり、おおいに感謝しなければならない）。当館にとってこれらのコレクションは、不景気へのひとつの免疫となりえたのであり、それは非常に幸運なことでもあった。

各地で、バブル全盛期から競って行われてきた大規模なイベント的展覧会も、やや収拾に向かいつつあり、会場の異常な熱気のなかで二重・三重の列を越えて小さな作品を見なければならない無意味さに、ようやく気付く時がきたようである。あらためて、博物館の事業を考え直す頃かとも思われる。

初心者対象の古文書講座開設

青梅市郷土博物館

当博物館では、平成３年度から「町方文書調査」を開始し、これまでに有力商家などの古文書調査を続けています。

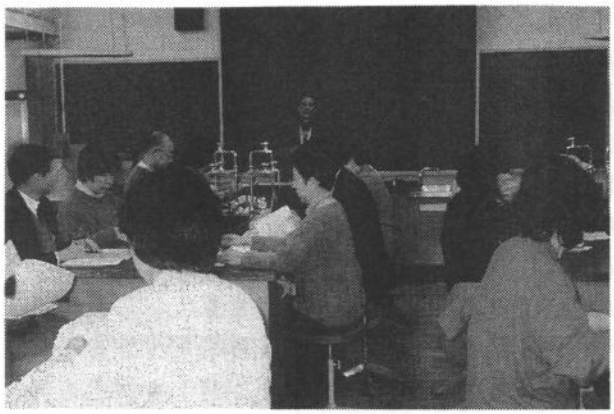
これらの調査によって、判明した事実等については、平成10年度の特別展＝青梅宿＝でも展示に活かした他、今後の展示活動にも積極的に活用していく考えです。

近年、一般市民の間で「古文書を学びたい」といった希望者が多く、市民センターでの講座でも応募者が定員をオーバーし、抽選をして決定する程であります。

そこで、当館では平成10年度事業の一環として『基礎から学ぶ古文書入門講座』を計画しました。この講座の目標は、古文書を読める人の底辺の拡大と後継者の育成といった欲張ったもので、次の要領で募集いたしました。

期間は平成10年７月から12月まで、６ヵ月間（月３回）の長丁場の講座で定員15人としましたが、18人の申し込み（年齢層は20代後半から60代前半までの広範囲）が有り一応全員受け入れることとしました。

講師として法政大学御岳山古文書学術調査団



団員滝沢博先生にお願いし、入門編であるため異字、古字、俗字、略字などの説明からスタートしました。これまで、近世文書を中心に「村鏡」「御殿女中・吉野みちの手紙」「仁君開村記」などを教材に講座が進み、受講生は着実に実力をつけつつ有ります。

なお、本講座は受講生の希望で平成11年３月末まで延長することになりました。

当館としては、古文書を読める層の拡大を図り、市内に点在している古文書の収集、解読に力をいれ、先人が残した文化遺産の解明に今後とも努力していく考えであります。

大盛況！プラネタリウム特別投影
「しし座流星群がやってくる」

東大和市立郷土博物館

今年の「しし座流星群」はテレビや新聞でも取り上げられ、たいへん話題になりました。

当博物館のプラネタリウムでも、11月13日（金）から15日（日）の３日間、一日一回だけ、しし座流星群についての解説を行う特別投影を実施しました。

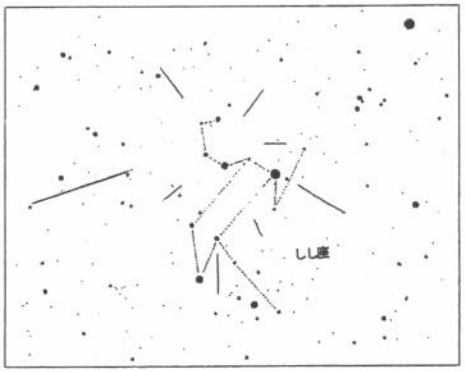
やや過熱ぎみのマスコミ報道のためか、市民の関心も高く、当日は朝から問い合わせの電話が鳴り響き、館内は観覧希望者で長蛇の列ができました。初日の混雑ぶりに、急遽、整理券を配る一幕もありました。

投影中は、こちらの解説にうなずいたり、驚いたり、いろいろな反応がかえってきました。投影が終わってからも多くの質問があり、関心の高いことがわかりました。

解説のためのスライド作成など準備に時間がかかりましたが、実施したかいがあったと感じています。

実際のしし座流星群は予想よりも流れ星の数が少なかったものの、明るい流れ星が多く、街なかで流れ星をみたという声も多く聞かれました。

これからも、ホットな話題に対応していける博物館でありたいと思います。ちなみに、しし座流星群自体は今年だけでなく、毎年みられる現象です。



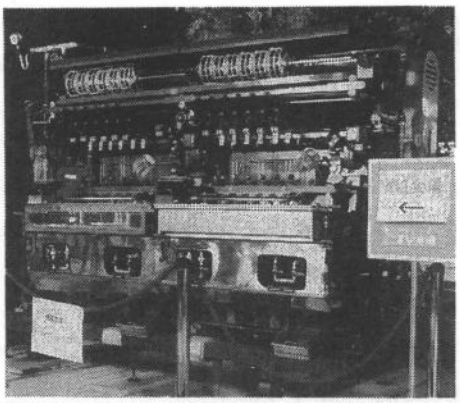
東京都農業試験場秋川庁舎旧蔵　蚕糸関係資料について

羽村市郷土博物館

東京都農業試験場秋川庁舎は、かつては蚕糸指導所・蚕糸試験場と呼ばれ、養蚕や製糸に携わる人々から親しまれてきましたが、昨年３月、蚕糸業法・製糸業法の廃止に伴いその歴史を閉じることになりました。羽村市郷土博物館では、東京都農業試験場より、この秋川庁舎で使用されたり、展示・保管されていた蚕糸業関連資料約1300点のご寄贈をいただきました。これは、平成８年に当館所蔵の養蚕関係資料が東京都の文化財指定を受けたことなどがきっかけとなり、閉庁に際してお話をいただき、実現しました。

資料の内容は、蚕糸関係の教育普及用資料としてパネル・蚕生態模型・旧式の座繰機など民具・まゆや生糸のサンプル、繭検定関係資料として検定用自動繰糸機・糸長測定機・セリプレン検査標準板・粒数器、調査研究資料として顕微鏡・精密秤・土壌検査機器・理化学実験器具、飼育関連資料として、金属製サシダン・同コノメ・自動式まゆ落とし機（ゲバ取りつき）など、新旧の蚕糸関連資料が含まれています。具体例を挙げると、検定用自動繰糸機は全長2.8メートル・全幅1.3メートル・重量は１トンを超える機械で、ボイラー等を接続すれば稼動可能な状態に分解復元し（電源を入れれば空運転可能）、移動できるようキャスター付きのベースに設置したものです。

これら資料については、今後、整理が終わりしだい三博協加盟各館を中心に、希望される館への貸し出しも行ないたいと考えております。都民の財産を、当館で代理してお預かりしたという認識でおりますので、各館におかれましても、ぜひご活用いただければ幸いです。



「多摩の女性の武家奉公」展の準備をして

江戸東京たてもの園

当園では今年度新規に３棟の建造物が増え、その公開記念事業を始め普及事業も活発に行っています。

筆者は年に１度のささやかな特別展の担当となり準備を進めています。テーマは復元建造物に関することか、多摩の歴史文化に関することから選ぶことになっています。ささやかなと言ったのは、江戸東京博物館と比較した話です。私は以前、江戸博の企画展を担当しましたが、余りに規模が大きく、広い展示場をうめる資料集めや分厚い図録の製作に四苦八苦し、細かいところまで丁寧にできたか疑問が残ります。

今回、予算もテーマも限定されているなかで、あまり取り上げられていないもので一般の人の興味も引く内容をと考え、知恵を絞りました。段々と企画内容が形になってくるのを見ると、むしろ限定されたことで無駄を省き内容を凝縮できたのではないかと思っています。広報予算も削減されたので、早くから動き無償のメディアを効果的に活用しています。勿論結果を見ないと何とも言えませんが。

テーマの関係上、資料と情報を集めるため、多摩地域を歩き回りました。三博協に属する各館をはじめ、教育委員会や市史編纂室など多くの方にお世話になっています。その地域では周知のことでも、はじめて知ったことも多くありました。さらに、各館が地域住民と親密な関係を築いているのに感服しました。ただ、行政区域で分断されてしまっている現状があります。以前、新宿、品川、板橋、足立４区が協同で展覧会を行いました。多摩地域をテーマとした展覧会を各館が協力してできれば、素晴らしいと思います。

「多摩の女性の武家奉公」展は1999年３月16日から４月25日まで開催します。多摩地域の女性が江戸城大奥や大名屋敷の奥に奉公に行った例を取り上げ、多摩と江戸との結びつきを考えます。

歴史講座「ヤマ」の石造物めぐりの実施

武蔵村山市立歴史民俗資料館

現在、武蔵村山市域では東京都西部公園緑地事務所により野山北・六道山公園の整備事業が行われています。その整備内容は湿地の保全、雑木林の萌芽更新、水田景観の復元などであり、かつての「ヤマ」の風景の復活が図られています。この公園は最終的には武蔵村山市と瑞穂町にまたがる狭山丘陵一帯の約256ヘクタールの広大な面積となる予定です。

近年まで狭山丘陵の雑木林はその放置により暗く、人の入れない場所と化してしまい、丘陵内にある石仏などの文化財の所在がわからない状況となっていました。いったん、石仏を探しに「ヤマ」に入ると、手や足はすりきずだらけ、行けども行けどもツゲやヒサカキ、くもの巣だらけでした。

市内旧村の各集落の境界や狭山丘陵の村々をつなぐ古道がこの丘陵の中にあり、その周囲には庚申塔、馬頭観音、小石祠、石灯籠など江戸時代以降造られた石造物が多く残されていたのです。雑木林の放置は景観の面だけではなく、文化財の所在確認の面でも大きな問題となっていました。

それが、この公園整備により明るい雑木林の林床が少しづつ戻ってきました。そして、放置され、倒れていた石造物も起こされ、元の「ヤマ」の景観も次第に復元されていきました。今年度、当館では、5月と1月に明るさの戻った雑木林の中に残る石造物をめぐり、それらの建てられた「場」の確認や銘文の確認を行い、地域の歴史の学習の機会を提供しました。

放置され、倒れていた石造物も起こされた。
（左：愛宕山常燈、右：愛宕大権現）

市制35周年記念企画展「日野新選組展」

日野市ふるさと博物館

当館では、市制施行35周年と土方歳三の130回忌を記念して『日野新選組展』（平成10年10月～12月13日）を開催し、全国から多数の新選組ファンが訪れました。

これまで小説や映画のイメージで語られることが多かった新選組ですが、「新選組のふるさと」ともいえる当市には、新選組ゆかりの史跡や日野宿の人々と新選組の関係を物語る史料が数多く残されています。

「豊玉」という俳号を持った土方歳三の俳句からは、彼の感受性や性質が見受けられ、また故郷にあてた手紙の文字からは、写真に残された彼の姿に通じるものが感じられ、まさに地元ならではの史料を紹介しました。

また近藤勇が、日野宿問屋である佐藤彦五郎（日野本郷名主兼帯）をはじめとする故郷多摩の人々にあてた手紙は、京都政局の最新情報をもたらす役割を果たしたと共に、新選組に所縁のある多摩の豪農や富商たちが、結成時における資金援助など、物心両面でその活動を支えていたことを示す重要な史料となっています。

日野では、明治維新のことを「御一新」と言わずに「瓦解」（＝徳川幕府の崩壊）と呼んだと伝えられています。このことは、新選組を生み出した土地柄である日野のみならず、多摩地域の人々の精神的風土を考えていく上での大変重要なキーワードになると考えられます。

展示準備を通して、新選組は幕末維新期における多摩の地域史と蔦のように絡み合い、実は地域史の宝庫であるということに気付きました。

多摩地域にはまだ多くの関係史料が残されていますが、それらを関連付けていくためには、各館同士の連携と情報提供がとても大切であると思います。また、このテーマの今までにない集客力の大きさを考えると、財政状況が厳しくなっている昨今、当館にとって様々な意味で考えさせられる企画展となりました。

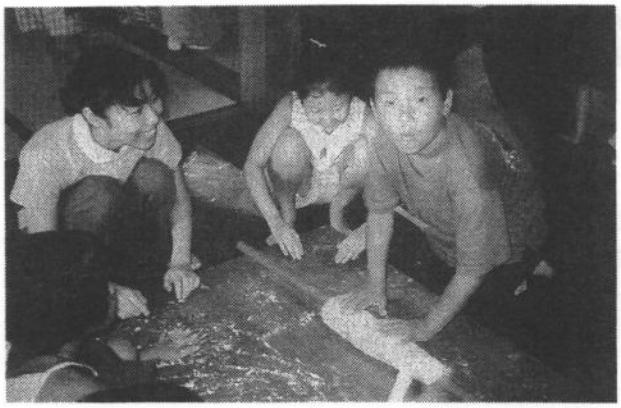
体験型博物館では

清瀬市郷土博物館

当館は、歴史、民俗の常設展示や美術展、観察会、映画会などを行っているが、当館の活動を最も特徴づけているのは伝承スタジオでの体験学習である。伝承スタジオでの主催事業は伝統行事の再現や伝統料理、機織、染物の各教室、藁草履やしめ縄の講習会、小学３年生を対象とした宿泊体験学習などである。どの事業も人気が高く、募集人数が30人程度ということもあり抽選もれやキャンセル待ちの方が多い。

市民の関心が高いのは喜ばしいことであるが、参加者が体験学習をした後その体験がどのように影響したのかが大変気になるところである。いずれも１回から数回の講座であるから多くを期待する方がいやらしいかもしれないが、参加者が何か一つでも心に留めてくれればと願わずにいられない。もっとも、機織教室からサークルが生まれた事例があるし、味噌作り講習会の実施後、市内の陶器店で保存用の甕が多いに売れたこともある。主催事業はまだ反応が分かり易い。それ以外に希望者（団体）にはうどん作りなどの体験学習の場を提供し指導もしているが、その場合はどうか。実は通常の業務外の仕事なので職員にとっては大変な負担となるが出来る限り要望に応える様やりくりしている。しかし、参加者たちは終わった途端家路につくので感想を聞く間もないし、その後どうなったかも分かり様がない。妙なフラストレーションがたまるのも無理からぬことだ。そんな折、一人の学生が学芸員志望なので勉強させてくれとやって来た。聞けば10数年前の宿泊体験学習での経験が志望動機となったという。当時蒔いた種が芽を出したわけだ。

体験学習に限らず展示など全てにいえるが、事業の効果についてはすぐに結論を出せないこと、人に何を伝えたいのかを意識することが重要であると改めて感じた。



武州下原刀展

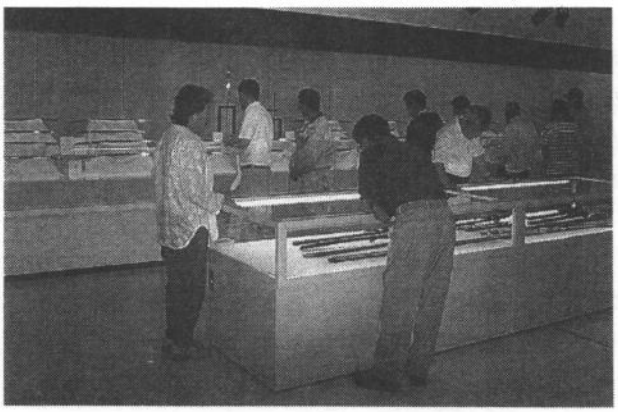
福生市郷土資料室

今年度の展示の中から、特別展示「武州下原刀展」を紹介します。

武器である刀剣が長い歴史の中でこれほどまでに大切に扱われた国は、日本をおいて他に無いと言われます。直接武器として用いない刀剣を後世に伝え続けたことは、刀剣に人を魅了する美があり、刀剣の美を理解する日本人特有の美意識によるところが大きかったのでしょう。

今回の特別展では室町時代から江戸時代末期に至るまで、歴代の下原刀工が製作した刀・槍・薙刀など七十余点を展示しました。下原鍛冶は、室町時代に武蔵国守護代・大石氏の庇護を受け恩方村（現在の八王子市）で刀槍類を製作し、江戸時代には恩方村から横川村・慈根寺村（現在の八王子市）等の他、多摩各地に散在し、刀槍を製作した刀工群です。展示品で最古の物は天文年間（1532～54）に始祖・周重が製作した十文字槍です。最新の物は文久年間（1861～63）に吉之（乞田―現在の多摩市―に住む宮川鍛冶一門）が製作した刀です。いずれも歴代の下原刀工が渾身の力を込めて鍛えた一品です。

郷土刀・下原刀は時代を超えて、鑑賞する人に日本刀の美と日本人の美意識について教えてくれる貴重な美術資料であり、また多摩地方を代表する郷土の文化財であり、貴重な歴史資料といえるでしょう。



ミニ展による情報発信と受信

府中市郷土の森博物館

19号で紹介したように、新たに常設展示室での小さな展示会—ミニ展—を始めた。資料収集と調査研究の成果を公にして、常に新しい情報を提供する、と言えば聞こえは良いが、観覧者数減少の対応策でもある。とはいえ予算はなく、頼りはパソコンだけ。解説パネルはもちろん自前。A3二つ折りの解説シートも館内印刷である。

このミニ展、昨年８月から今年11月までに８回を数えた。結構、ハイペースである。というより、やや自転車操業気味かもしれない。

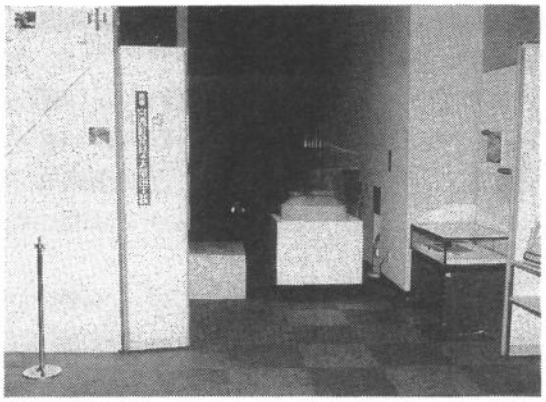
しかし、ふだん膨大な展示資料の中で目立たなかったり、常設展示の趣意にそぐわないため収蔵庫に眠り続けている資料が陽の目を見る機会にもなる。一つの資料が持つ情報を最大限に活かすこともできる。いろんな意味で資料の有効活用につながる。

展示回数の増加は、見易く、美しく、いかに的確に情報を伝えられたか、という展示技術の向上を図るためにも有効なはずだ。

そしてなにより、それによって市民のニーズを知ることもできる。数多く提供した情報のうち、何に市民は反応してくれるのか。

今年の夏から秋にかけては、最近市内で大量に出土した中世の銭を取り上げる展示をした。予想以上に観覧者が多かったばかりでなく、観覧者に説明をすると、一方通行でなく、会話が成り立つことが多いのに驚いた。最新資料で、発掘時からマスコミで取り上げられていたためでもあろうが、銭に対する興味の深さを感じた。

市内の武蔵国府関連遺跡では、和同開珎をはじめとする古代銭貨の出土も少なくない。武蔵国での和銅産出の直後に和同開珎が鋳造されていることも思い出される。近い将来、和同開珎を中心とした古代の銭貨をテーマに特別展を企画してみたい、と思っている。案外、２匹目のドジョウはいないかもしれないが。



『立川の生活誌』の刊行

立川市歴史民俗資料館

当館では、教育普及活動の一環として、『立川の生活誌』を刊行しています。これは、立川で生れ育った人（古老）を対象に行った聞き取り調査の内容をもとに、本にまとめたものです。そこには、自らの体験に基づいた様々な話しが語られており、その当時の生活の様子を垣間見ることができます。

聞き取り調査そのものは、平成３年度から続けてきており、その結果として、平成７年度に第１集を刊行しました。以来、毎年１冊ずつのペースで刊行し、平成９年度までに第３集を刊行しています。

平成10年度は、それぞれ生き方のちがう二人の女性をとりあげ、第４集として刊行します。

博物館の活動は、どうしても「もの」が語る情報だけに眼が向けられがちですが、これからも、「もの」だけにとらわれずに、活動の幅を広げてゆけたらと考えています。

「意味付けを待つ多くの資料に思う」

東村山ふるさと歴史館

長い間に蓄積されてきた資料たちに、どのような意味付けをしていくのか。それは博物館施設に従事する職員として、重要な職務であると思っています。

たとえば、唐箕。一台一台よくみると、少しずつ形の異なっていることに気付きます。左に示すように、そもそもの形状の差、使用していく中で手を加えていった痕跡のあるものなど、さまざまです。しかし、形の異なることはわかっても、そこにどのような意味があるのかを探っていくには、比較材料がないと出来ません。

唐箕に関しては、小坂広志氏や近藤雅樹氏等の研究や、平成３年に町田市立博物館で開催された「多摩の民具―江戸時代の農具―」展等で、多くの資料が紹介されてきました。ですので、一地域の博物館資料のどの部分に着目して資料を比較していったらいいのか、読み取る手立てとしていくことが出来ます。しかし、このような資料ばかりではないのが、実情なのです。

そこで提案なのですが、この三多摩公立博物館協議会で、共通資料による比較展示などは出来ないものでしょうか。調査項目を立てて、情報を持ちより、所蔵資料を一同に展示する巡回展のようなものを。このような企画ができたならば、意味付けを待つ資料たちに、本当の意味での資料整理をしていくことが、できるのではないかと思うのです。

ちなみに、当館の来年度資料展示は春に麦わら細工および井戸関係、秋に郵便局について開催する予定です。資料を読み取るため、お聞きすることもあるかと思いますが、そのときはご協力下さいますよう、お願い申し上げます。

[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
1	3枚	[redacted]	セキイタ式	明治25年6月25日新調
2	3枚	回転式（鉄製歯車）	セキイタ式	
3	4枚	突き押し式（脚付べた）	セキイタ式	大正8年5月8日
4	4枚	突き押し式（脚付べた）	セキイタ式	
5	4枚	突き押し式	箱　式	本吉の商標
6	4枚	突き押し式	セキイタ式	大正8年5月新調
7	4枚	突き押し式	箱　式	所沢大黒屋製作所
8	4枚	突き押し式	はね板式（ゆり）	昭和22年9月
9	4枚	回転式（鉄製歯車）	セキイタ式	
10	4枚	[redacted]	セキイタ式	
11	4枚	回転式（鉄製歯車）	注：回式（ゆり）ゑ：出口式（3段）	一宮市鈴木商店[illegible]
12	4枚	回転式（鉄製歯車）	回転式（無段）	安野式ウチバ唐箕
13	4枚	[redacted]	回転式（無段）	安野式ウチバ唐箕
14	4枚	回転式（鉄製歯車）	回転式（無段）	安野式ウチバ唐箕
15	4枚	回転式（鉄製歯車）	回転式（無段）	農協型[illegible]
16	4枚	回転式（鉄製歯車）	回転式（無段）	農協型[illegible]
17	4枚	回転式（鉄製歯車）	回転式（目盛5段）	丸本式人力唐箕

＊　曲がる文字：型そのものが旧所有者によって改造されているとわかる資料
＊＊　■：読解不明文字

編　集　後　記

東京都三多摩公立博物館協議会報ミュージアム多摩は今号で20号となり、一つの節目であると思います。そこで今回は以前からテーマとして取り上げられている博物館の連携について、もう一度考えてみることとしました。昨年、新宿区立新宿歴史博物館・板橋区立郷土博物館・北区飛鳥山博物館・豊島区立郷土資料館では４館合同企画「トラム（路面電車）とメトロ（地下鉄）」が開催されました。この合同企画についての内容や問題点、そして今後の課題について、新宿区立新宿歴史博物館の学芸員である奥原哲志氏に原稿の執筆を依頼しました。

多摩地方は自然に恵まれ、歴史も古く、また文化財も豊富です。川や街道などといった連携の可能な大きなテーマも数多く存在するでしょう。今後このような企画が三博協会員館でも行われ、各館の活性化につなげて行ければと思います。それにはこれまで以上に情報交換や連携といった協力・交流を必要としていくのでしょう。

―― ミュージアム多摩　No. 20 ――

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長 羽村市郷土博物館長 清水　武
〒205-0012 東京都羽村市羽741
電話 042－558－2561

編集委員：奥多摩　水と緑のふれあい館
調布市郷土博物館
福生市郷土資料室
瑞穂町郷土資料館